■開館30周年記念特別企画展

いわての漆

会期：平成22年10月２日㈯～11月７日㈰　　いわて文化史展示室・特別展示室

岩手県立博物館はことし開館30周年を迎えます。県制百年を記念して、1980年（昭和55年）に開館して以来、調査研究の成果を企画展・テーマ展として発表してまいりました。特に10年を節目として岩手県に深いかかわりをもつテーマを設定し、開館10周年には「北の鉄文化」、20周年には「北の馬文化」、という特別企画展を開催いたしました。

今回の開館30周年記念特別企画展には漆をテーマとして取り上げ、縄文時代から続くといわれる漆文化を多彩な資料を展示して、紹介いたします。

展示構成と概要

第１章　漆掻きと庶民の漆

ウルシとは

植物としてのウルシは、ウルシ科ウルシ属の落葉広葉樹です。中国原産と考えられ、古くから中国・朝鮮半島・日本列島の各地で栽培されてきました。現在、日本では東北地方を中心に局地的に栽培されています。樹高は７メートルほどで、６月に花を咲かせます。

ウルシの仲間は、以前はヌルデ属*Rhus*に分類されていましたが、現在ではウルシ属*Toxicodendron*として独立に扱うべきと考えられています。日本にはウルシの他に、ツタウルシ・ヤマウルシ・ヤマハゼ・ハゼノキの４種があります。

ウルシ属の学名は、*Toxico*＝毒の・*dendron*＝木という意味のラテン語です。その名のとおり、ウルシ属の植物は樹液の中にウルシオールという有毒成分を含み、人の皮膚にアレルギー反応を引き起こします。これがウルシかぶれです。

このように、一般的には避けたい植物なのですが、その樹液は塗料とも接着剤ともなり、縄文時代から利用されてきました。特に塗料としての漆は、美しくじょうぶな漆器を産み出し、現代まで数々の名品が作られてきました。高級品という印象のある漆器ですが、ある時期までは日常に見られるごく普通の生活必需品でもありました。

漆掻（うるしか）きと漆蝋（うるしろう）

漆はウルシの木から採取した樹液です。飴色でやや酸味のあるにおいがします。触るとほとんどの人はかぶれという炎症をおこしますが、触らなくても近づいただけでもかぶれるという人もまれに見られます。

漆を取ることを漆掻きといいます。樹皮にキズをつけて、にじみ出てくる樹液を掻き取るからです。また、漆を取る人のことも漆掻きといいます。現在では、二戸市浄法寺を中心に20人ほどが活躍しています。

漆掻きは６月の梅雨入りの頃から秋までのおよそ５か月がシーズンです。しかし、最盛期は盛夏で期間は短く、天候にも左右されるという厳しい条件の中で行われます。

漆掻きは一日におよそ100本の木から漆を採取します。これを一日山といい、ふつうは400本の木を用意し、４日の周期で漆を採取します。かつては、漆の木は畑の周囲や川の堤防など、日当たりのよい場所に見られたものですが、現在では少なくなってしまいました。

漆の採取には七つ道具があります。その中で、漆を掻きとってためておく容器がタカッポ（掻き樽）です。ホオノキがよく使われます。漆掻き道具は刃物が多いので、鍛冶屋さんが作りますが、このタカッポは漆掻き職人が自分で作るということです。

タカッポ　二戸市浄法寺歴史民俗資料館蔵

また、漆の実から蝋燭（ろうそく）が作られたことは、漆ほどは知られていません。蝋燭はキノミロウソクとも呼ばれていました。実を採るためには漆の木を枯らさないで、生かしておくことが必要でした。これはかつての漆掻きの方法で「養生掻（ようじょうが）き」と呼ばれています。

庶民の漆

漆はわたしたちの生活とどのようにかかわっていたのでしょうか。

岩手の漆器を代表するものに浄法寺塗（じょうぼうじぬり）と秀衡塗（ひでひらぬり）があります。どちらも国の伝統的工芸品に選定されています。

浄法寺塗は、その多くは庶民の漆器といわれています。代表的な漆器は御山御器という装飾の少ない椀です。そのほか、ひあげや漆絵のついた木皿は代表的な漆器です。昔はどの家庭にもあったのではないでしょうか。

御山御器　二戸市浄法寺歴史民俗資料館蔵

秀衡塗は漆絵と金箔などを使った独特の秀衡文様が特徴です。伝世品には秀衡椀と呼ばれる三つ椀があります（古秀衡椀と呼ぶこともあります）。漆絵には、植物文など10種類ほどの吉祥文が描かれています。奥州藤原氏の頃からあったかどうかは定かではありませんが、一関市を中心とする県南地方に分布しています。

奥州市衣川区に増沢塗というものもありました。増沢は、現在はダムの底に沈んでしまいましたが、増沢塗の技術を伝える人たちが漆器の生産を続けています。

また、漆は漆器だけでなく、いろいろなものに使われています。鉄瓶で有名な南部鉄器、岩手の代表的な箪笥である岩谷堂箪笥、一関市東山町の紫雲石硯（しうんせきけん）などの伝統工芸品をはじめ、染めの型紙、神楽で使われるゴンゲンサマや面にも漆が使われています。さらに、漆の木自体も小さく切られて、アバという浮子になり、漁で使われました。

このように、漆は日常の生活のいたるところで見られたのです。

（生物部門　鈴木まほろ
民俗部門　瀬川　修）

第２章
縄文時代まで遡る漆の利用

縄文時代の漆工芸

数千年の時を経て、今もなお艶やかな光沢を放つ漆製品。遺跡の発掘調査によって、様々な漆製品が出土しています。

現段階で、最古の漆製品と考えられているのは、今から約9,000年前の墓穴から見つかった赤色漆塗り装飾品です。北海道函館市垣ノ島Ｂ遺跡の発掘調査で発見されました。

墓穴の大きさは、1.4×1.2ｍの楕円形で、頭頂・肩・腕・脚の部分に漆の装飾品が確認されました。装飾品は、赤く塗った幅約1.2㎜の帯状の紐を、別の軸糸に巻き付けて作られています。

赤漆塗り製品出土状況および埋葬状態復元
北海道函館市　垣ノ島Ｂ遺跡　縄文時代早期
函館市教育委員会画像提供

岩手県内での漆の利用は、縄文時代の終わり頃、盛んになります。盛岡市御所湖に位置する萪内遺跡では、赤色漆塗弓や赤色漆塗竪櫛、木胎漆器、赤色漆塗土玉などが見つかっています。岩手町豊岡遺跡からは、漆塗土器だけでなく、赤色の原料となる石や、石を砕いた石器も出土しています。漆製品と製作に関わる材料によって、太古の漆製品がどのような技術で作られているのか、最新の科学分析を交えて展示いたします。

奥州藤原氏の漆利用

岩手県では、弥生時代は漆の利用は盛んではありませんが、古代には再び多く用いられるようになります。

二戸市堀野古墳出土蕨手刀の鞘や、矢巾町徳丹城から出土した木製冑には漆が塗られていました。漆は一旦硬化すると腐ることのない、丈夫な塗料です。

奥州藤原氏の時代には、烏帽子や様々な部材、生活用具である椀・皿・折敷などに用いられるようになります。藤原氏の政庁、平泉館跡と推測されている柳之御所遺跡から、様々な漆製品だけでなく、刷毛や漆パレットなど、生産用具も見つかっており、平泉において漆器生産が行われていたと推測されます。

柳之御所遺跡の南に位置する伽羅之御所跡の井戸跡からは、優美な鏡箱が出土しています。黒漆塗りの上に、はらりはらりと散りゆく梅の花が、金・銀で描かれています。

金銀蒔絵鏡箱　重要文化財
平泉町伽羅之御所跡出土　平安時代後期
平泉町蔵・画像提供

（考古部門　八木勝枝）

トピック

中尊寺金色堂と柳之御所遺跡出土盤からみた奥州藤原氏文化の漆芸技術

奥州藤原氏の文化を特徴付けるものの一つに、漆文化が挙げられます。中でも金色堂は、漆工技術の粋を集め、金を豊富に使い、前代未聞の「皆金色」の浄土世界を創りあげ、中尊寺に現存する唯一の建造物として当時の漆文化を今に伝えています。昭和37年（1962）に解体復元修理が行われ、その折、内陣巻柱および

長押から剥離した塗膜片が今日まで保管されてきました。

奥州藤原氏の政庁跡として知られる柳之御所遺跡からは、唯一、内面に赤色漆が塗られた六弁の輪花盤が出土しました。昭和女子大学によって保存修復された際に採取された塗膜片の断面構造が、金色堂内陣巻柱および長押の塗膜片とともに、昭和女子大学、岩手大学及び当館の研究者によって協同調査されました。

その結果、金色堂の施工、盤の製作に際し、下地混和材として中尊寺周辺に分布する軽石凝灰岩が使用されたことが判明しました。現代漆工における上記混和材の使用は未確認であり、金色堂の施工、あるいは盤の製作に用いられた下地調整技術は、既に途絶えた可能性があります。

本企画展では、金色堂内陣及び柳之御所遺跡から出土した盤を対象に行われた塗膜断面構造解析結果を基に、漆器製作技術、とりわけその下地調製技法からみた奥州藤原氏文化における漆芸について紹介します。

（文化財科学部門　赤沼英男）

第 3 章　花開く漆の美

漆の美は、漆塗りそのものの美しさ、そして、漆と相まった金銀の蒔絵（まきえ）や貝殻による螺鈿（らでん）の美しさです。縄文時代から始まる漆の文化は、奈良時代以降行われる蒔絵や螺鈿などの装飾技法の発達によって花開きます。

寺院と漆

寺院は知と技の宝庫です。最新の情報や技術と多様な文物の集積地であり、また発信地でもあります。

漆工技術もその一つで、平泉の中尊寺には、平安時代後期（12世紀）の工芸技術の精華が伝えられています。漆芸をはじめ、岩手の伝統工芸はその起源を奥州藤原氏の時代に求めるものが多くありますが、それも中尊寺の輝きがあればこそといえるでしょう。

螺鈿八角須弥壇　復元模造　中尊寺蔵
原資料　国宝　平安時代後期（12世紀）　中尊寺大長寿院蔵

漆の産地として名高い浄法寺には、神亀５年（728）創建という天台寺があります。浄法寺塗は、天台寺に遣わされた僧侶たちが日用の器などを作るために漆工技術を持ち込んだことに始まると伝えられます。

水沢の正法寺に残る「正法寺椀」は、寺用の食器として数多く作られたといわれるものです。貞和４年（1348）に正法寺を開いた無底良韶（むていりょうしょう）禅師は能登（のと）（石川県）の生まれで、その縁から、能登の漆工技術がもたらされたのではないかとも考えられています。

大寺院は有力者との結び付きも強く、建築や調度、多岐にわたる奉納品の中にも、優れた漆芸を見ることができます。

漆絵立花図　岩手県指定文化財
正徳６年（1716）　天台寺蔵

岩手の古椀

岩手には、名椀として称賛される古椀があります。「正法寺椀」「秀衡椀」「南部椀」等です。

黒漆塗椀　（正法寺椀）
正法寺蔵

沢瀉漆絵椀　（秀衡椀）
毛越寺一山　白王院蔵

枝菊文箔椀　（南部箔椀）
盛岡市中央公民館蔵

正法寺に伝わる「正法寺椀」は、高台のない鉄鉢形といわれるもので、簡素な美しさが目をひきます。

「秀衡椀」は、奥州藤原氏三代秀衡の名を冠する金箔付きの椀です。高台が高く、大ぶりで、飯・汁・菜の三ツ組となっています。

「南部椀」は、江戸時代に南部領（盛岡藩）で産した椀で、浄法寺や安代近辺で作られ、「浄法寺椀」ともいいます。「箔

椀」と呼ばれる金箔付きの椀は、藩の重要な産物でした。

岩手に残る古い椀が作られた時代や場所などについては、不明な点も多くありますが、その美しさゆえに、様々に語られ、伝えられてきたともいえます。

盛岡南部家と一関田村家ゆかりの品

江戸時代、現在の岩手県域の大半は、盛岡藩と仙台藩の領域でした。一関藩は仙台藩の支藩です。江戸時代の漆芸品として、盛岡藩主・南部家と一関藩主・田村家ゆかりの武具や調度を紹介します。

盛岡藩では、江戸時代前期に城下の整備と併せて諸職人が盛んに登用されました。漆に関わる職人たちも、藩の御用をつとめながら技を磨いたことでしょう。

（歴史・古美術部門　齋藤里香）

第４章　現代の漆

岩手県は国内第１位の漆の産地です。しかし、漆の消費量の約98パーセントが外国産の漆です(平成20年度)。残りの２パーセントほどが国内産の漆です。このわずかな国内産漆の約78パーセントを浄法寺漆が占めているのです。近年は文化財の修復に国内産の漆を使用するため、需要が伸びています。それでも、急に増産できるわけではないので、中長期的な展望がどうしても必要となります。浄法寺産の漆は浄法寺漆という名前でブランド化を図っています。生漆が浄法寺産であることを証明し、品質と知名度の向上を目指しています。

また、県内の漆芸家や研究者などが新しい漆製品の開発に取り組んでいます。ユニバーサルデザインの漆器（UD漆器）や身近なものへの漆の応用で付加価値を高めています。

出荷用漆樽　浄法寺漆認証ラベル付き
二戸市うるし振興室蔵

漆は水に強く、酸やアルカリにも強いという特性を持っています。紫外線を除けば、多少のことでは変質しません。そのような漆をもっと身近に感じてみたいものです。

（民俗部門　瀬川　修）

雉子尾雌雄御太刀
岩手県指定文化財
延宝５年（1677）
盛岡南部家伝来
盛岡市中央公民館蔵

■シンポジウム

11月３日（水・文化の日）「縄文漆を科学する」　11:00-16:00　講堂　当日受付　聴講無料

出席者　阿部芳郎氏（明治大学）、宮越哲雄氏（明治大学）、吉田邦夫氏（東京大学総合博物館）、河西学氏（山梨文化財研究所）、本多貴之氏（明治大学）、神谷嘉美氏（東京都立産業技術研究センター）　＊詳しくはお問い合わせください。

■秋期セミナー　13:30-15:00　講堂　当日受付　聴講無料

10月３日（日）「縄文時代のウルシ利用」能城修一氏（独立行政法人森林総合研究所）
10月10日（日）「うるしの話」高橋勇介氏（岩手工芸美術協会会長）
10月11日（月・祝）「漆の魅力～いわての漆工芸」冨士原文隆氏（八幡平市安代漆工技術研究センター）
「新しい漆製品の開発と可能性」小林正信氏（岩手県工業技術センター）
「漆のある暮らし」町田俊一氏（岩手県工業技術センター）
10月24日（日）「漆蝋をつくる」高田和徳氏（御所野縄文博物館長）
11月７日（日）「漆の可能性～地域おこし～」
中村裕氏（二戸市うるし振興室長）、松沢卓生氏（岩手県浄法寺漆生産組合事務局長）

■展示解説会　10月２日（土）、10月16日（土）、10月30日（土）、11月６日（土）　14:30-15:30　展覧会場　要入館料

■漆掻きの実演　10月30日（土）、10月31日（日）、11月２日（火）、11月３日（水・文化の日）　10:00-15:00　予定
芝生広場　見学無料　実演：岩手県浄法寺漆生産組合

その他

展示解説図録、漆製品の販売（ミュージアムショップ）